

新しい酒は新しい革袋に

New wine must be poured into new wineskins.

鈴木 隆 男

【研究ノートの目的】

この研究ノートでは、組織と、その組織を構成する構成員との関係について、生物学における“動的平衡”という概念を用いて考察することを目的としている。その際、組織を構成する構成員の(世代)交代を考察するために、“新しい酒”と“新しい皮袋”という概念を援用する。

【新しい酒と新しい皮袋】

キーワードである“新しい酒”、“新しい皮袋”、及び本研究ノートの表題である“新しい酒は新しい皮袋に”という表現は、新約聖書の冒頭の四つの福音書のうち、ヨハネによる福音書を除いた、共観福音書(Synoptic Gospels)と呼ばれる三つの福音書、すなわちマタイによる福音書、マルコによる福音書、ルカによる福音書に共通して現れるイエスのことばである。

私たちの社会では、この“新しい酒”、“新しい皮袋”、あるいは、“新しい酒は新しい皮袋に”という表現はどのように使われているのであろうか。“故事・俗信ことわざ大辞典”によると、この表現は、“新しい考え方を表現するためには、新しい方法や形式が必要だ”という意味で使われる。対句として、“新しい酒を古い皮袋に盛る”という言い方も使われるが、こちらは先のものとは逆に、“新しい考えを表現するために、それを古い形式の中に押し込むことによって、新しい考えも古い形式も、ともに生かされない”という意味でつかわれる。

これらの表現のもとになっているのは、先に述べたように、新約聖書の冒頭の三つの福音書に共通する記述である¹⁾²⁾。紀元70年ごろ成立

したとされる(木田他, 1995)、最も古いマルコ福音書では、2章の21節から22節に次のような記述として現れる。

また新しき酒を古き皮袋に盛る人はあらず、もし、しかせば酒は皮袋を裂きて流れ、皮袋もまたすたらん、新しき酒は新しき皮袋にこそ盛るべけれ、と。

同様の表現がマタイによる福音書では、9章17節に次のように現れる。

また新しき酒を古き皮袋に盛るものはあらず、しかせば皮袋破れ、酒流れて、袋もまたすたらん、新しき酒は新しき皮袋に盛り、かくて二つながら保つなり、と。

ルカによる福音書の、5章37節から39節だけが、先の二つの福音書と少し異なった表現を含んでいる。

また新しき酒を古き皮袋に盛る人はあらず、もし、しかせば、新しき酒は古き皮袋を裂き、かつ流れ出でて皮袋もまたすたらん。新しき酒は新しき皮袋に盛るべく、さてこそ、二つながら保つなれ。また古き酒を飲みながら、ただちに新しき酒を望む人はあらず、たれも古きを、よしといえはなり、と。

このことばが語られるのは、イエスが徴税人のレヴィを自分のもとに招いたのち、彼の家で

食事をとる場面である。

そこでは多くの税吏や罪びとがイエスと一緒に食事をしていたのだが、その様子を見たファリサイ派の律法学士たちがそのことを取り上げて、イエスの弟子に、“なぜあなたたちの師は、徴税人や罪びとと食卓を共にするのか”と詰問するのである。

当時“徴税人”は、ローマ帝国の支配下において、同胞から、ローマ帝国のために税を徴取するという職業ゆえに、しかも、しばしば私腹を肥やしていたゆえに、人々から敵視され、差別されていた。先のことばは、この律法学士の問いに対するイエスの答えの一部である。

ファリサイ派は、旧約時代末期から新約時代初期のユダヤの社会の指導的な階級を形成する人たちである。彼らは、モーセがイスラエルの民を率いてエジプトを脱出したのち、シナイ山で神から授かった、2枚の石板に刻まれた“十戒”を中心とした旧約³⁾の教え(律法)を解釈し、それを人々に周知する役割を担う宗教的指導者層である。彼らは厳格に律法を守ることを人々に求めたが、しばしばその教えは形式的で偽善的なものになりがちであった。

しかも彼らの思想の根底には、“救われるに値する正しい人”と、“罪の結果、救われるに値しない人”という二分法があった。そして少なくとも、律法を順守している自分たちは“救われるに値する者”であると考え、徴税人や罪びとのような“救われるに値しない者”ではないことを神に感謝するというようなことがしばしば行われていたようである。

そのようなファリサイ派の主張に対してイエスは、神の教えの本質的な問題をといて、しばしば彼らと対立していた。この部分では、ファリサイ派の人々は、徴税人や罪びとと同席することによる穢れを避けなくてはならないと主張するのであるが、イエスは、“医者が必要とするのは、健康な人ではなく病人である”、“花婿と一緒にいるときには客は断食しない”、“新しい布で古い服に継ぎをあてるものはいない、そんなことをすれば新しい布は古い衣服を引き裂いてしまう”というたとえの後で、このことを

語るのである。イエスの主張は、神の教えの本質が、形式的な律法の順守を超えたものだというものであったのだろう。

ところで、当時のユダヤ人の社会では、“酒”といえは“ぶどう酒”を意味した。試してみれば容易にわかるが、ぶどうの果汁は短時間のうちに腐敗してしまう。そのため、ある年のぶどうの収穫期から次の年の収穫期までの間、飲み物として貯蔵するためには、発酵させてぶどう酒にする必要があった。酵母によって発酵を続け、アルコールと二酸化炭素を生み出す新しいぶどう酒を保存するための入れ物として、使い続けた古い皮袋を用いると、発酵による二酸化炭素の圧力によって、皮袋は裂けてしまい、中に入っていたぶどう酒も皮袋もともにだめになってしまう。

ルカによる福音書だけが、この部分に続いて、“古いぶどう酒を飲んだ人は、新しいものより古いものがいいという”という意味のことばが続く。このことは当時のユダヤの指導者層が形式にこだわって新しいものを受け入れないことに対する痛烈な批判だと考えられている。

律法を中心とした旧約聖書の教えを、文字通り守ることが救いのために必要だという考え方に対して、イエスはそのような偏狭な考え方を乗り越え、神の愛とそれに基づく弱者の救済を意図したと考えられている。

そのような自分自身の主張を、“新しい酒”ということばに、当時の古い社会の慣習やしがらみを超えて、新しく構築される社会秩序を、“新しい皮袋”ということばに託したのであろう。対句として私たちの社会で同じような意味で使われている、“古い皮袋”ということばは、伝統的な教えから一步も踏み出そうとしなかったユダヤ人の社会のように、新しい考え方を盛るためにふさわしくないものとしてのたとえであらう。

【動的平衡 (dynamic equilibrium)】

動的平衡とは、物理や化学の反応において、互いに逆向きの過程が同じ速度で進行することで、系全体としては時間変化せず平衡に達して

いる状態にあるということを意味する。生物の世界では、合成と分解、酸化と還元など相互に対立する逆方向の反応が連続的に生じ続けることによって、生物としての秩序が維持され、更新され続けている状態を示す述語である（福岡, 2017）。生命が、エントロピー増大の法則（熱力学の第二法則）の支配下にあつて、なお生命としての秩序を維持するための、巧みな仕組みといえる（福岡, 2017）。生命は、それを維持するために、生命としての秩序の崩壊に先回りして、自らを構成している要素を破壊し、さらにそれを再構築するという仕組みを自らのうちに準備した。それによって一時的にエントロピーの増大に対抗しながら生存を継続できる。一方、長い時間のうちには修復しきれない損傷が蓄積し、死をもたらすことになる。しかし生命は、自らの死を迎える前に、新しい世代に生命を受け継ぐことによって、38億年の長きにわたって連綿と存在し続けてきたと考えられる（福岡, 2017）。

【組織のありようと動的平衡】

組織もまた生物と同じであると考えられるであろう。組織を構成する成員には交代があつても、組織そのものは維持される。このことを福岡（2009）は“人が常に入れ替わっているのにブランドがたもたれている状態”と表現している。それはしばしば“その組織らしさ”といわれるものである。

しかしながら、詳細に考えてみると、構成員が変わった組織は、同じ名称の組織であっても、その働きやふるまいが多少異なる可能性のあることが考えられる。

古くは鴨長明の筆になる“方丈記⁴⁾”の書き出しの次の部分にも同様のことが示されているように思われる。

行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある、人と栖と、また、かくのごとし。

玉敷の都のうちに、棟を並べ、薨を争へる、高き、卑しき、人の住ひは、世を経、尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家は稀なり。或は去年焼けて、今年造れり。或は大家亡びて小家となる。住む人も、これに同じ。所も変わらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、わづかに一人・二人なり。

河の流れは、見ていると変化なく、同じようであるが、そこを流れている水は、常に入れ替わっていて、もとの水ではない。世の中の人と住居の関係もまた水の流れと同じように、全体として同じであっても、個々の人や住居は変化している。都そのものは変わらずにあつても、その中にある家は、必ずしも昔からあったものばかりではない。

方丈記そのものは、鴨長明の感じた“諸行無常”という仏教的な歴史観に裏打ちされたものであるが、河の流れがひと時も同じ水をたたえるものではなく、世にある人とその人の住む家の関係もまた、見かけの上で同じように見えながら、内実は常に変化を続けているといえる。

我々の感性の中にはこのような諸行無常という感覚を受け入れる素地があるが、このことを逆の方向から眺めると、先に述べたような、動的平衡という、生命の巧妙な仕組みとよく似た現象が見え隠れするように思える（福岡, 2009）。

このことは、最初に述べたような、“新しい酒”と“新しい皮袋”の関係を考えてみても明らかであろう。同じ組織であっても、構成員が異なれば、その振る舞いが異なるであろうことは十分に考えられる。むしろ異なった構成員に同じ振る舞いを求めることのほうに無理があるだろう。

“新しい酒”に対応する“新しい構成員”を入れる組織は、“新しい皮袋”でなくてはならないだろう。古い酒を味わうことは、特にぶどう酒であれば、心地良いことではあるが、それが“新しい皮袋”の、あるいは“新しい酒”の

振る舞いを矯めることには最大限の注意を払わなくてはならないだろう。

“新しい酒”のためには、“皮袋”も新しくならなくてはならない。もちろん酒を入れる皮袋と違って、人間の組織を考えると、は、“古い皮袋”のありようを参照することは必要であろうが…。

【注】

- 1) 文中に引用した日本語の聖書のことばは、“新約聖書(エ・ラゲ訳, 中央出版社, 1959)”による。
- 2) “故事・俗信ことわざ大辞典(小学館, 1982)”には、この表現がマタイ福音書に基づくという意味の記述がある。これは誤りではないが、他の福音書に言及していないという意味において、不十分である。“明鏡ことわざ成句使い方辞典(大修館書店, 2007)”も同様であり、インターネット上にも同様に不十分な記述が見られる。この点で“広辞苑(第7版, 岩波書店, 2018)”では、“など”という表現が使われており、マタイ福音書だけの記述ではないことを示唆している。
- 3) 当時のユダヤの人々の間には、“旧約聖書”という概念はなかっただろう。彼らにとっては、律法や預言者の言行をまとめた書物のみが信仰の指針として存在していた。“旧

約聖書”という区分は、イエスの死後、ローマ帝国がキリスト教を国教としたこともあって、イエスの新しい教えや、宣教のための弟子たちの書簡などを集めたものを編纂した結果、それ以前に成立していたものを“旧約聖書”、それ以後のものを“新約聖書”と呼んだことによる。しかしここでは便宜的に、“旧約(聖書)”、“新約(聖書)”という表現を使う。

- 4) 文中に引用した方丈記は、“方丈記全注釈(梁瀬一雄著, 角川書店, 1971)”による。

【引用文献】

- 福岡伸一(2009年4月14日)『動的平衡』を書いた福岡伸一氏(青山学院大学教授・分子生物学者)に聞く. 東洋経済ONLINE. (アクセス:2017年12月31日).
- 福岡伸一(2017)新版 動的平衡 生命はなぜそこに宿るのか. 小学館新書.
- 北原保雄(編著)明鏡ことわざ成句使い方辞典. 大修館書店, 2007.
- 木田献一, 野本真也, 橋本滋男, 和田幹男(監修)新共同訳聖書辞典. キリスト新聞社, 1995.
- 新村 出(編)広辞苑 第7版. 岩波書店, 2018.
- 尚学図書(編) 故事・俗信ことわざ大辞典. 小学館, 1982.